

立命館大学大学院
人間科学研究科



学びの融合は、心理学を超える



**Human
Science**



立命館大学大学院 人間科学研究科

佐藤研究科長 まずは最初に、入社以来どういった仕事をされているかを教えていただけますか？

田中 2001年に現在の楽天株式会社に入社しました。最初は開発のエンジニア、楽天市場の注文管理のバックオフィスシステムや広告表示プログラムなどのシステム設計・開発的な仕事をしており、2-3年したら、インターネットサービスのシステム企画など、サービス企画・開発を中心に仕事をしていました。ちょうどその時期が事業が拡大した時期で、会社は何でもチャレンジするスタンスでした。その頃プロ野球にも参入して、球場でのイベントの企画をしたり、ポータルサイトの戦略企画もしていました。2008年から仕事がマネジメント業務になり、最大で30名くらいの部署をまとめておりました。2013年から今の部署である楽天技術研究所というところで、海外からも研究者を集めてさまざまな研究をしているのですが、研究をどうビジネスに結びつけるかを探るコーディネータ的な仕事です。

佐藤研究科長 それらの仕事で心理学のバックグラウンドがどのように役立っていますか？

田中 私と関わるチームは、コンピュータビジョンの研究者が多くて、また、ヒューマン・コンピュータ・インタラクションの領域も担当しています。これまでやっていた視覚や認知心理のバックグラウンドが役に立っていて、比較的話が通じ易い。最近でいうと「ディープ・ラーニング」、あれは、コンピュータに脳と似た動きをさせて、人と同じような判断をコンピュータがしてくれる考え方なのですが、その原理も理解し易くなっています。あとは、研究とビジネス両方見るので、大きな視点と小さな視点が両方必要になります。ミクロなもの、小規模なアイデアから全体のビジネス展開を考えると、全体から実際の細かいプロセスに落とすにはどうすればよいか、今はそういった大から小へのブレイクダウン、小から大へのエンハンスメントを見ることを必要とする仕事をしております。これらのプロセスは心理学にすごく通じるころがありまして、神経間の伝達物質がどのように人の意識に影響するか、というもの

Introduction

今、社会や企業で心理職が必要とされている理由

を掘り下げていく学問ですが、心理学を修めたことで細かいところが連なって、大きな流れを作るといった概念が身についたのは大きな収穫でした。

心理学の実験では、どういうものを実証したいから、どういった実験をどのような条件で行い、結果の数字から何を読み取るか、という計画が重要になります。これはそのままビジネスのプロセスと一致します。ビジネスにおいても仮説を元に事業計画を立てて、その計画の検証テストをするのですが、結果を正確に評価するために変数になるべく取り除く必要性などはその時に身に付きました。意外とそういったものは、皆が身につけているものではないと思います。

チームとして働くときに、心理学的なアプローチでいうと、コーチングに近い社会心理学的なアプローチ、それとチームビルディングは今でも参考にしています。

心理学の根本的なところで、心理学は人への興味からスタートして、人を理解しようというのがモチベーションです。人が中心のヒューマンセントリック社会で、単純な作業は機械にやってもらって、人はもっと頭脳労働に従事となったときに、どういう仕事をすれば人は人として尊重されていくか？人のモチベーションをあげることが出来るのか？この人はどういったことを大事にしているかの理解がないと、その人を尊重することは難しいと思います。人への興味、人をベースに考えていくうえで心理学はすごく役に立つと感じています。

お客様のニーズを考えていくなかで、心理学を学んでいると人より多い選択肢からスタートできると思います。楽天はインターネットの会社なので、お客様の声は直接のメッセージだけでなく、アクセスログにも残りますし、そこにしか残らないものもあります。それを、お客様はどういった心境でクリックしたか、どうしてこれを選んだかを分析するときに、心理学の知識があると、分析の材料が多くあります。そこはすごくメリットになります。

佐藤研究科長 大学でこういった勉強しておけばよかったことはありましたか？

田中 今の会社、社内でのコミュニケーションは、半分くらいは英語です。だから、英語をもっとやっておけばよかったですね、楽天技術研究所では、20カ国以上から研究者が集まっており、普段の会話も英語が多いです。

佐藤研究科長 今後、心理学を学んだ学生に期待したいことはありますか？

佐藤研究科長 × 楽天 田中さん

田中 心理系を学んだ学生の特徴は、ロジカルであることと総合力が高いこと。ゼネラリストとしての目線を持っていてほしいです。自分がしておけばよかったと思うことは、チームでもっと取り組むことを何かしらしておけばよかったとは思っています。スポーツなどでは結構あると思うのですが、そうではないカテゴリーで、学生のうちにしておけば良いと思います。

佐藤研究科長 今は、修士卒業で企業が採用しているケースが増えてきたのですが、そのことについてはどう考えられますか？

田中 弊社も修士卒業はわりと多いと思いますが、修士卒業の方は勉強熱心ですね。ですので、ビジネスの現場に入ってもその場で学んで活かしていこうというモチベーションは高いですね。また逆パターンで、ある程度ビジネスで成功した方が、修士を取りに大学院に進学する人も良く見ます。個人的な期待としては、アカデミックとビジネスがもうちょっとシームレスに行き来できると、お互いに刺激があって良いかと思っています。

佐藤研究科長 一昔前だと、修士や博士の方は研究の視点が強すぎて、視野が狭いとか、専門以外はやりたがらないような傾向もあったと思いますが、そういうことは感じないですか？

田中 楽天の場合だと、人材募集要項にジョブディスクリプションを明記しているので、採用側がマッチングをとるとのことだと思いますが、専門性を深めたい方もいれば、今までの経験を活かして別のことにチャレンジしていきたいという方もたくさんいるという印象です。

佐藤研究科長 現在、心理学・人間科学に関しては、大学院はすごく調子が良くて、立命館大学人間科学研究科の社会人院生は、看護師やカウンセラーなどが多いです。私としては、民間企業の社員さんにも来てほしいです。

今の日本の企業風土だと、学位を持っていることの価値がまだまだ低いですね。それに比べて海外の企業は学位の影響力は高い。日本もそういった学位の価値が上がればと期待しますし、我々はそれに見合った院生を社会に輩出していく教育をしていきたいですね。



プロフィール

佐藤隆夫 立命館大学総合心理学部長および大学院人間科学研究科長
ブラウン大学大学院心理学部博士課程修了 哲学博士（実験心理学 1982/10）
東京大学大学院人文社会系研究科教授を経て、現職へ。

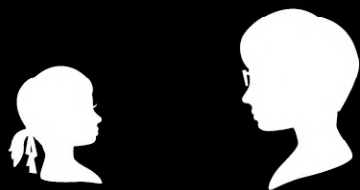
プロフィール

田中 由紀 楽天技術研究所 PMOグループ 東京大学文学部行動文化学科（現 心理学科）卒

Human Science

スクールカウンセラー

教育機関において心理相談業務に従事する心理職専門家。
児童・生徒・学生の不登校や、校内・学内での種々の問題行動などの対応に当たる。



Human Science

法務技官・家裁調査官

少年鑑別所や刑事施設で面接や各種心理検査などを行い、
また改善指導プログラムを実施する法務技官と、家庭裁判
所で扱われる離婚事件や少年保護事件などを扱う家裁調査官。



Human Science

心理職 （公務員・心理カウンセラー・産業医）

企業や組織で悩みを持つ人の相談窓口としてカウンセリングを行う心理カウンセラーや産業医。



Human Science

社会福祉・高齢者介護 児童福祉・障害者援助

さまざまな状況や年代の方を対象に対人援助を行う。



Human Science

看護職

保健師、助産師、看護師、准看護師のこと。保健・医療・福祉
の幅広い分野で人々に寄り添い、健康を守る。



Human Science

マーケット予測 消費者行動分析 商品企画

消費者行動と心理の密接な結びつきを追求し、
新たな商品開発やマーケットの潜在ニーズを
掘り起こす。





学びの融合は、心理学を超える

“人間”という言葉はもともと、“人の世”を指していた。
テクノロジーの発展で激しく変化していく世の中だからこそ、
あらためて人の心と社会のあり方が問われている。

いま、科学は何を見つめるべきなのだろうか。

人間科学は、人と社会を統合的に研究する学び。
心を科学で解き明かす心理学と実践で答えを探る臨床心理学、
そして、社会と人の課題に向き合う対人援助学の3つの観点で、
心理学の諸領域を超えていく。

従来のスケールを超えた、日本随一の院生数と教員数。
領域を横断した、専門家による多角度からのアプローチ。
学術と実務の垣根を超えた、産学協同による研究と実践。
国境の枠を超えた、国際色ゆたかな環境。

心の内だけではなく、“人間”を総合的に知るために、
分野を超えて学び、専門性をさらに深めていく。

人と社会を洞察し、広く深く究める
『人間科学研究科』が、いま始まる。

1P-2P	今、社会や企業で心理職が必要とされている理由
3P-4P	INDEX
5P-6P	人間科学研究科は、こんな大学院です。
7P-8P	人間科学研究科でできること。対談1
9P-10P	人間科学研究科でできること。対談2・対談3
11P-12P	教員紹介
13P-14P	教員紹介
15P-16P	大学院生インタビュー
17P-18P	ゼミの運用と、カリキュラム

Information

人間科学研究科は、こんな大学院です！

科学＋哲学＋実践
＝
心理学／人間科学

実社会で化学反応を 起こせる人材育成

心理学を超えたところに総合心理があり、人間科学となります。科学・哲学・実践の3つの側面を上手く融合させ、実社会で価値ある化学反応を起こせる人材を育成します。

教学・研究・資格取得の共存

博士前期課程3領域での充実したカリキュラムと、40名を超える教員の在籍による充実した研究領域、そして、国家資格である公認心理師や、臨床心理士、その各種民間資格取得のための必要科目を揃えています。

社会人院生在籍による アカデミックと プロフェSSIONALの融合

博士前期課程、後期課程ともに社会人院生が在籍し、実務からの課題解決研究とアカデミックな視点からの研究が並存し、学术界と実社会の融合を起こします。

領域融合による 新しい領域の創出！

多くの教員を有する人間科学研究科。それぞれの研究領域の融合と連携により、新たな学問領域を創出することを目指します。

基礎心理の上に臨床あり！

人間の心理に迫る総合心理学を土台として、基礎実験や理論検証を行った結果をベースに、実践的臨床研究での裏づけを行うことができます。

基礎心理から臨床 対人援助まで網羅

人間科学という幅の広い学問領域の中に、人間の心の解明をする基礎心理学、実践的施しを行う臨床心理学、社会福祉、支援などの実社会への支援を行う対人援助学、これらを網羅しています。



5つの特徴

1 『臨床心理士』対応プログラムの募集枠を25名へ拡大

臨床心理士資格取得認定プログラムの定員枠はこれまで15名でした。人間科学研究科では今後の社会のニーズに応えるべく25名に募集枠を拡大。臨床心理士対応プログラムとしては、国内有数の規模を誇ります。

2 教員数を大幅に増員し、幅広い心理領域を網羅

人間科学研究科では、臨床心理・対人援助の領域14名、基礎系心理の領域23名の教員で運営を行なっており、そのうち、臨床心理士16名と対人援助・基礎心理の教員を含めて、計43名体制になります。

3 研究領域を多様化。周辺領域への融合・発展が可能に

融合の機会が少なかった臨床心理学・対人援助学領域と基礎心理学領域。人間科学に関する多様な研究により、院生が自らの学問的関心を中心にとらえて、さらに周辺領域へ融合・発展させることができるカリキュラムや研究機会を用意しています。

4 現役社会人でも学べる夜間・土曜対応カリキュラム

就業しながらも限られた時間を有効活用し、学位の取得を目指す社会人院生のニーズに応える平日夜間・土曜開講を実現しました。現役で働く社会人にも対応した開講形態となります。

5 国家資格『公認心理師』の認定プログラムに対応

医療保健領域から教育、福祉、産業、司法、被災者支援、社会福祉と幅広い領域における課題に対応する公認心理師。人間科学研究科では認定プログラムに対応するとともに、アカデミックな角度からのアプローチも行います。

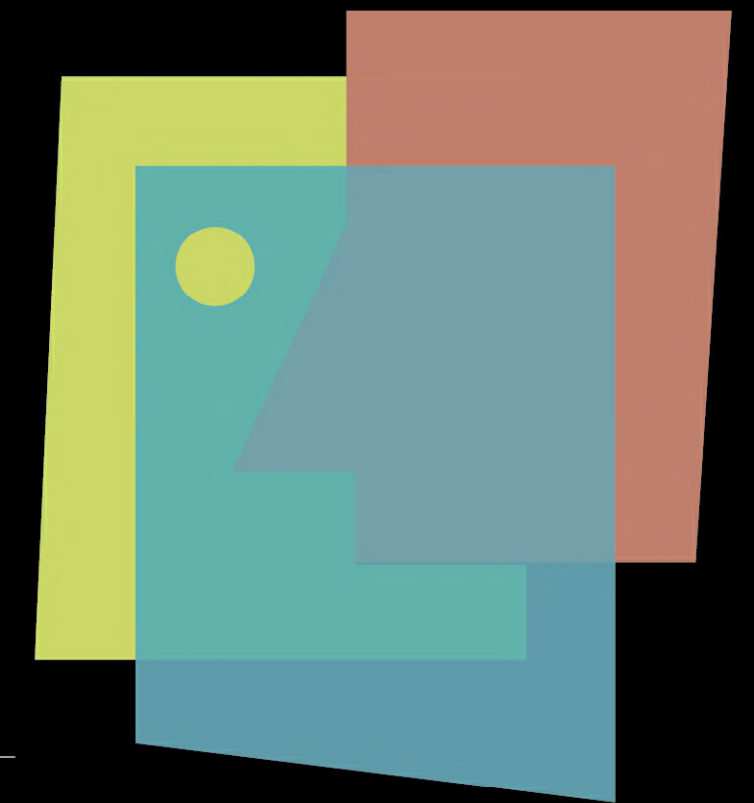
Human Science
PSYCHOLOGY
CLINICAL
HUMAN
SERVICE
DEVELOPMENT
R
FORENSIC
EDUCATION
MEMORY
AGING
SOCIOLOGY
BEHAVIOR
COGNITION
FAMILY
NEURO

Interview

人間科学研究科でできること

立命館大学大学院
人間科学研究科

人間科学研究科のコンセプトは「学びの融合」。
3つの領域の行き来により、どのような化学変化が起こるのか。
8P、9P、10Pでは、「心理×臨床心理」「臨床心理×対人援助」
「対人援助×心理」の組み合わせで対談の場を設け、
それぞれの視点から学びの融合について語っていただきました。



Human Science

Yuko YASUDA
安田 裕子

立命館大学総合心理学部准教授
2004年立命館大学大学院応用人間科学研究科応用人間科学
専攻修士課程修了。
博士(教育学)(2010/03 京都大学)。
専門は、臨床心理学、生涯発達心理学、質的心理学。日本質的心理学会常任理事、対人援助学会常任理事。主な著書に『TEMでひろがる社会実装—ライフの充実を支援する』(安田裕子・サトウタツヤ 誠信書房)、『不妊治療者の人生選択—ライフストーリーを捉えるナラティブ・アプローチ』(新曜社)など。

心理 × 臨床心理

チームとして動くことが強みになる

Interview1 人間科学研究科でできること

Makiko NAKA
仲 真紀子

立命館大学総合心理学部教授
1984年お茶の水女子大学大学院人間文化研究科人間発達学専攻、博士課程後期課程修了。学術博士(お茶の水女子大学)。専門は、認知心理学、発達心理学、法と心理学。法と心理学会理事、日本心理学会常務理事。主な著書に『子どもへの司法面接：進め方・考え方とトレーニング』(編著、有斐閣)など。日本科学技術振興機構「多専門連携による司法面接の実施を促進する研修プログラムの開発と実装」プロジェクト代表。

まずは、法心理学において現在の取り組みをお聞かせください。

仲 元々、子どもの記憶の発達や、大人と子どものコミュニケーションといった認知発達の研究をしていました。弁護士さんから、子どもの証言の信用性を心理学的な観点からみて欲しいと依頼がきっかけで、子どもの供述や法廷での証言に関心を持つようになりました。子どもから証言を得ることは難しく、ついつい誘導してしまいがちです。どうしたら、より正確により沢山の証言を得られるか、司法面接の研究を始めるに至りました。この面接法の開発や、専門家の方々、児童相談所の職員や警察官や検事さんたちに伝える研修プログラムの開発も行っています。現在の取り組みは、コミュニケーションや記憶の基礎研究、面接法の開発、研修プログラムの開発実践などです。

安田先生が専門家として、司法面接に関わったきっかけは何だったのでしょうか？

安田 院生時代、現場に出る機会はなく大変もどかしい思いを抱えていました。その時、修士課程の恩師が声をかけて下さり、現場で学ぶことになりました。私自身、実践活動では、女性と子どもへの支援活動をしたい、と思っていました。当時、DVのある家庭で育つ子どもへのケアが見過ごされていることから、そこに焦点をあてた支援プロジェクトを立ち上げることとなりました。今考えると、司法と臨床の融合ですね。さらに数年後、司法面接における臨床的ケアを考えるとという観点から、司法面接の研究プロジェクトにかかわることとなりました。司

法面接については知らないことばかりでしたが、学びの機会をいただき是非にと思い、参加させていただきました。

司法と臨床の研究が一緒になることで何が生まれてくるのでしょうか？

安田 臨床実践ではDVや離婚、犯罪・虐待といった、司法との連携が必要なものもあります。心理的なしんどさを抱える方に対し、カウンセリングではその方の心的事実に寄り添うことが軸となる一方、司法との連携においては、客観的事実が求められる。心的事実だけではとらえられない部分をいかに確認していくのが大事になってくるのです。

仲 被害者とされる方から事情聴取をする際、「話したくなければ話さなくていいですよ」という態度をとりがちです。けれども情報を得るには「しっかり、詳細に話してください」とも言わなければならない、矛盾が生じます。前者は心の回復をめざす臨床的アプローチ、後者は事実確認のアプローチだとするならば、これらは異なる専門性を反映している、と言えます。そこで最近は、それぞれを分けて行うのがよい、と考えられるようになりました。記憶は急激に失われ、汚染や変遷も起きやすいので、まずはできるだけ早く事実確認(司法面接)を行い、その後速やかに心のケア(臨床)に入るのがよいとされています。的確な対応から再発を防ぐには、正確な事実確認は必要です。だからこそ、事実確認と心理ケアの両方が必要となり、互いが両輪となることで強みが生まれます。

従来は相反する部分があったものが、このような流れになったのは、新しい動きですね。

仲 事件化することで福祉が関与できにくくなっていた部分を少なくし、一緒に携わっていきましょうということです。精神医療、心理臨床的なアプローチは、さらに長期的な視野をもって子どもや家族を支援していくことを可能にすると思います。

安田 現在、児相の専門家が臨床的ケアの観点をもってケースに対応していますが、福祉の枠組みを越えて、トラウマなどを扱う心理臨床の専門家、さらには、身体のケアを行なう医療のかかわりが重要であると考えられます。

互いに相入れなかった領域について、補い合いことで新たな可能性が生まれるというわけですね。

仲 確かに、職種間で連携が充分取れていないところもあるかもしれません。また、法的な証拠を目指す場合、検事さんが面接者になるのがよいとされるケースも確かにあります。でも、そこを警察や児童相談所、その他の専門家が支援することで、事実確認を行うと同時に福祉、心理臨床的にも重要な情報収集ができます。何よりも、子どもが複数の機関を巡る必要がなくなり、負担は大きく軽減されます。こういう活動が多くなるといいですね。

Masayoshi MORIOKA
森岡 正芳

立命館大学総合心理学部教授
1982年京都大学大学院教育学研究科教育方法学専攻博士課程
後期課程修了。博士(教育学)。
神戸大学大学院人間発達環境学研究科教授などを経て、現職。
専門は、臨床心理学、文化心理学。日本心理学会理事(2017-現在)、
日本心理臨床学会代議員(2013-現在)。
主な著書に『臨床ナラティヴアプローチ』(ミネルヴァ書房)、『うつ
し 臨床の詩学』(みすず書房)、『物語としての面接』(新曜社)など。

臨床心理 × 対人援助

融合を産み出す土台をここでつくる

Interview2 人間科学研究科でできること

Tadashi NAKAMURA
中村 正

立命館大学人間科学研究科教授
立命館大学副学長／産業社会学部、応用人間科学研究科教授
立命館大学法学部、立命館大学大学院社会学研究科博士後期
課程単位取得退学。
1989年より立命館大学助教授を経て現職。社会学修士。カリフ
ォルニア大学バークレー校、シドニー大学客員研究員など経験。
専門は社会病理学、臨床社会学、社会臨床論。
日本社会学会、日本社会病理学会、日本心理臨床学会、日本犯
罪社会学会など所属。
主な著書に『対人援助学の可能性』(福村出版)など。

本研究科における「クラスター制度」の意味は何でしょうか？

中村 大学院教育を行うにあたり、クライアントの生きる場を重視しています。
また、社会人院生の職種も多様なため、互いに学び合うことができる。福祉や教
育など特定の領域に閉じず、多領域横断によって複眼的な視野を持たせることが
目的です。また、クラスターに家族機能・社会臨床の領域を置いたのは、親密な
関係性の激変があったからです。日本社会全体で暴力は減っているのに、一定の
訴求性のある関係性でのいじめ、体罰、DV、虐待等といった暴力は激増してい
ます。家族の経験をしていない人はいない。社会性ある臨床や支援にひらかれて
いくべきだと考えました。

これらの話に臨床領域に関わることの意味はどうでしょうか？

森岡 人間科学における臨床領域はまだ若い領域です。これらの実践に関わるこ
とで臨床が育ち、社会における人間理解が深まります。心理学の発展と交差しつ
つ自分たちの学問を建てる段階です。そこに総合的な人間理解を加えることが、
融合を産み出す土台となると思います。

中村 深く掘り下げる専門の縦の知識に加えて、広く連携しながら横に広がる知
識を協働で得ていきます。連携は見えやすい。それでも融合はまだ見えない。こ
れは相当難しい。知の融合はある意味結果です。私はその縦と横に加えて斜めが

必要で、それは人間理解や高度な教養だと思う。いまここにつながる歴史認識、自ら
や異なる文化への敬意と理解、アートなどの感性等です。

**中村先生が取り組まれていた家族機能・臨床クラスターでは、その問題解決のために、
事例を用いてその生の事象について議論をされていましたね。**

中村 現実とは何かの定義も含めて生きた課題をテーマにすることをすすめています。
常識的なものの見方の乗り越えも重視しています。

**過去現在未来を考えると、現在は、縦のつながりよりも、SNSなどを使った横のつな
がりが活発です。クラスターも時代に合わせて形作っていく必要があると思いますが。**

森岡 総合心理学部が入ることで交差軸が増えました。とくに法と心理、子どもの司
法面接や生涯にわたる発達支援は本学独特の領域だと思います。そこに臨床技法とし
て描画や語り、音楽を介したアートセラピーを加えることで斜めの軸として融合に向
かうことができます。

中村 ドラマセラピーなどもありますね。海外の刑務所では受刑者が自分の人生をド
ラマにして、演じるという芸術療法を取り入れた再犯防止もあります。罰を与えて直
接犯罪リスクに対応するのではなく、本来満たされていないニーズを満たして、個人
ケアをしていくことを目指す。これは本来の刑務所教育の形ではないが、あるべき姿

かと思います。これらは社会臨床のテーマ群です。

**クラスターでいろんな人たちが集まったときに、若者の考える器量を育てるま
とについて、どう考えますか？**

森岡 若い人たちの器量を育てるには時間がかかりますよ。彼らの横のつながり
への意識は社会性というよりは、まだ仲間性が基本なのです。一旦自分に立
ち返って、物事を考え、内省を深める時間が大学院でも用意できればいいの
ですが。

人間科学は世代継承という視点が要ります。即戦力にばかり着目せず、次
代へ繋いでいく人間科学をつくらないといけない。臨床実践の意味を次の世代
が深めていくようにできればいい。

中村 クラスターを組織した大学院教育をさらに重視したいと思います。領域
として強化したいのは産業や組織行動の領域です。それから、戦争の後の少年
兵の心のケアといったグローバルな視点での臨床や援助の領域です。「国境を
越える医師団」はチーム活動だし、コミュニティ心理学的支援をしています。
「国境を越える心理職」にも学びたいです。

Masaki HATTORI
服部 雅史

立命館大学総合心理学部教授
1996年北海道大学大学院文学研究科行動科学専攻博士後期課程
単位取得退学。博士(文学)。2016年より現職。
専門は、認知心理学、思考心理学。日本認知科学会(常任運営委員
・編集委員)、日本認知心理学会、日本心理学会ほか所属。
主な著書に、『基礎から学ぶ認知心理学』(共著、有斐閣)、『思考と
推論』(監訳、北大路書房)など

対人援助 × 心理

対照的なアプローチに触れる経験が、
専門性を高めてくれる

Interview3 人間科学研究科でできること

Kuniko MURAMOTO
村本 邦子

立命館大学人間科学研究科教授
1990年より女性ライフサイクル研究所所長(2014年3月まで)。
2001年The Union Institute 大学院博士課程修了(Ph.D)、現職着任。
専門は臨床心理学&女性学。主な著作に『暴力被害と女性』(昭和堂)、
『臨地の対人援助学：東日本大震災と復興の物語』(共著、晃洋書房)など

村本先生からこれまで対人援助学の実習で実施してきた東日本家族応援プロジェクトについて教えてください。

村本 対人援助学の実習と言っても、対人援助学領域、臨床心理学領域のどちら
もが参加できるプロジェクトです。応用人間科学研究科では、心理、福祉、教育、
医療など、対人援助に関わるあらゆる領域を連携・融合させたものとして対人援
助学を構築してきました。

当時、東日本大震災を受け、研究科の内部から「対人援助学を掲げてきた研究
科として何かすべきではないか？」と声上がり、プロジェクトがスタートしま
した。私の専門はトラウマで、虐待、DV、性暴力、災害、戦争がもたらす影響
を巡り、現場で治療や予防に関わってきました。この分野において、社会の視点
は外せない。この大災害に対して、唯一できる確かなことは、「証人になる」こ
とだと考えます。理不尽な運命に翻弄されながらも生きようとする人々にとって、
誰かが見てくれている、理解しようとしてくれているということがとても大きな
意味を持つということがわかっていました。対人援助の中には、解決されるべ
き具体的課題があって、専門的対応が意味を持つこともたくさんあります。一方
で、簡単には解決しない苦しみを抱えて生きる人々を支援し続けるのも大事なテ
マです。

教育という意味で、心理学を学ぶ院生にとって、こういった活動に参加すること
ごどのような意義があるのでしょうか？

服部 視野が広がるということではないでしょうか。心理学にも様々な考え方やアプ
ローチがありますが、特に、基礎的な心理学は、対人援助学のようなアプローチとは
対照的です。心理学の強みは理論なんです。つまり、目に見えないことや体験したこ
とがないことを予測できる。しかし、常識では想像もつかないことが発見できる一方、
理論で扱いやすい範囲のことしか考えなくなってしまう。人間の姿を見ずに、現実か
ら乖離してしまうのです。人の心のありさまをみるという意味で、こういったプロジ
ェクトに参加することは、自分の研究を根本から見直すよい機会になるのではないで
しょうか。自分の立ち位置を再確認することができるかもしれません。

心理学は理論から現実に向かう、かたや対人援助学は現実から理論に向かう。これ
らが相まみえるのは相当難しいことですが、研究に携わる者は常にそれを念頭に置き
ておく必要があると思います。だからこそ、対照的なアプローチに触れる経験は、専
門を極めようとする学生にとって大切なのです。

なるほど……。では、対人援助のこれまでの参加者で、特に変わったことはありまし
たか？

村本 ストレートで学部から入ってきた臨床心理学領域の院生でしょうか。彼らは
「専門家になるぞ」って意気込んで入ってきますよね。でも専門家である前に人間で
あることが認識できるってこと。人と人の出会いがあって、初めて専門知識、スキル
が成り立つことに気づきます。そこに自分を見つめ直す瞬間があり人間としての成長
があります。こういった活動を通じて、新しい相手との対話、出会いがあり、自分の

常識が変えられていくと思います。そのたびに自分の中の対応力が育つ。人間の
成長に関わる場所ですよ。常に自分の殻を破る変容力。

服部 心理学の領域だと、自分自身をまったく異なる文脈に置いてみて、新しい
視点を得るということでしょうか。心理学の用語で、アインシュテルングとい
うことばがあります。うまくいっている思考が硬直化することです。常識の殻は、
自分ではなかなか破れない。でも、新しい環境に身を置くことで
気づきがあり、自分で見つけようとしていくことができるかもしれない。

村本 被災地の人々が暮らす文脈の中に入っていき、五感を使って、人々に出
会い、交流します。そのなかで新しい発見があり、視点の転換があり、自分自
身の相対化がある。今はいろんな人の声を重層的に重ねて現実を描き出すこと
が成果だと思っています。院生たちはそこからちゃんと自分の研究テーマとの
関わりを見出していきます。さらに仕事、対人援助のあり方にも結びつけて整
理していきます。私は、「学び方を学ぶ」と言っていますが、被災地のことを
学ぶだけでなく、それを通じて、実践を通じて学ぶ姿勢を身につけてもらえれ
ばと思っています。

人間科学研究科 教員紹介 心理学領域

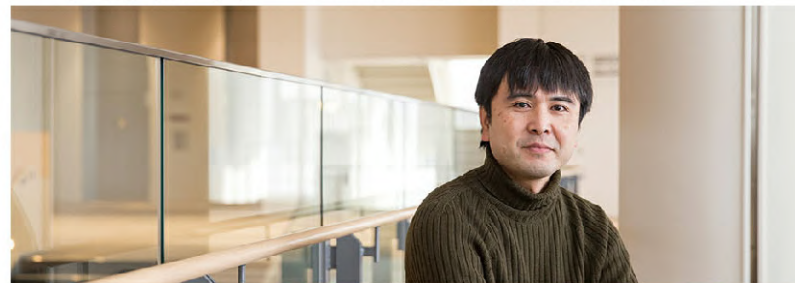
Human Science
PSYCHOLOGY
CLINICAL
HUMAN
SERVICE
R
FORENSIC
EDUCATION
COGNITION
BEHAVIOR
NEURO
MEMORY
AGING
SOCIOLGY

立命館大学大学院
人間科学研究科

Hiroshi UTSUNOMIYA

宇都宮 博

生涯発達心理学、家族心理学



Hiroaki OISHI

大石 衡聴

心理言語学



Naoko OKAMOTO

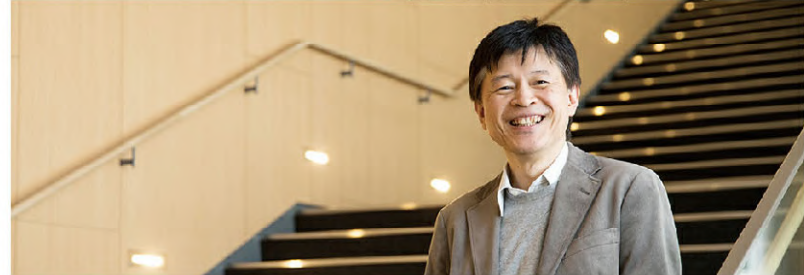
岡本 直子

臨床心理学

Yuko KAMISHIMA

神島 裕子

哲学、倫理学



Kenji KAWANO

川野 健治

心の健康とコミュニティ・文化の関係について

Michiko SAWANO

澤野 美智子

文化人類学、医療人類学、社会学



産業・組織心理学、組織行動論

Kiyoshi TAKAHASHI

高橋 潔

Akiyoshi KITAOKA

北岡 明佳

知覚心理学



Takao SATO

佐藤 隆夫

知覚心理学

Rie TAKAMATSU

高松 里江

ジェンダー、労働、家族、ライフコース



発達心理学

Noriaki TSUCHIDA

土田 宣明



Tatsuya SATO

サトウ タツヤ

文化心理学、心理学史、応用社会心理学



メディア心理学、オンラインメディアの効果研究、
広報学、広告学

Xue DOU

寶 雪

Introduction



※左上から縦にあいうえお順

教員についての詳細は、
QRコードをご覧ください



人間科学研究科ホームページ

Makiko NAKA
仲 真紀子

発達心理学、認知心理学、法と心理学



Yasuki YAGI
八木 保樹

社会心理学、人格心理学



Masayoshi NAGAI
永井 聖剛

認知心理学、生理心理学



比較発達心理学、乳幼児心理学

Yuko YATO
矢藤 優子



Masasi HATTORI
服部 雅史

認知心理学、思考心理学



Hiroki YAMAMOTO
山本 博樹

教育心理学、発達心理学



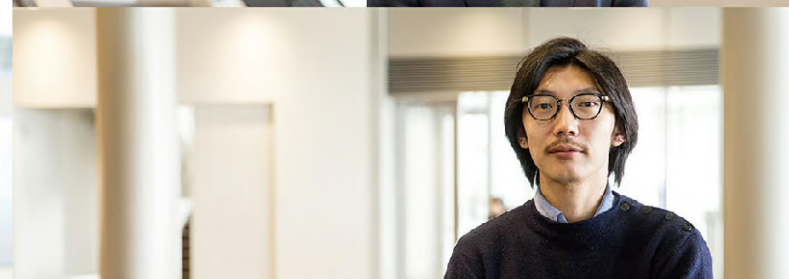
Yugo HAYASHI
林 勇吾

認知科学、人工知能、
ヒューマンインタフェース・インタラクション



法心理学、社会心理学、
パーソナリティ心理学、心理学史

Kosuke WAKABAYASHI
若林 宏輔



Yuji HOSHINO
星野 祐司

認知心理学



Tomoharu MORI
森 知晴

行動経済学、労働経済学、公共経済学



人間科学研究科 教員紹介

Human Science

PSYCHOLOGY
CLINICAL
HUMAN
SERVICE
R
FORENSIC
EDUCATION
COGNITION
BEHAVIOR
NEURO
FAMILY
AGING
SOCIOLOGY

立命館大学大学院
人間科学研究科

対人援助学領域



Akeyo ONOE
尾上 明代
ドラマセラピー、集団精神療法、芸術療法



社会福祉学
(司法福祉論・児童福祉論・学校福祉論)、
教育臨床、心理臨床
Masato NODA
野田 正人



Shinji TANI
谷 晋二
応用行動分析学、関係フレーム理論、
アクセプタンス&コミットメント・セラピー、
障害のある子どもとその家族への包括的支援



Naoki NAKASHIKA
中鹿 直樹
行動分析学、対人援助学



臨床心理学全般・発達臨床心理学・
学校臨床心理学
Rika MASUDA
増田 梨花



Tadashi NAKAMURA
中村 正
社会病理学、臨床社会学、社会臨床論



臨床心理学、女性学
Kuniko MURAMOTO
村本 邦子



臨床心理学領域

Hanako SUZUKI
鈴木 華子

カウンセリング心理学



Yuanhong JI
吉 沅洪

臨床心理学、異文化間心理学

Takashi MITAMURA
三田村 仰

臨床心理学、行動分析学



Koji MIYAGUCHI
宮口 幸治

非行臨床、発達障害、児童思春期精神医学、
神経学的認知トレーニング、
性加害防止プログラム、学校コンサルテーション

Kenji TAKEUCHI
竹内 健児

臨床心理学

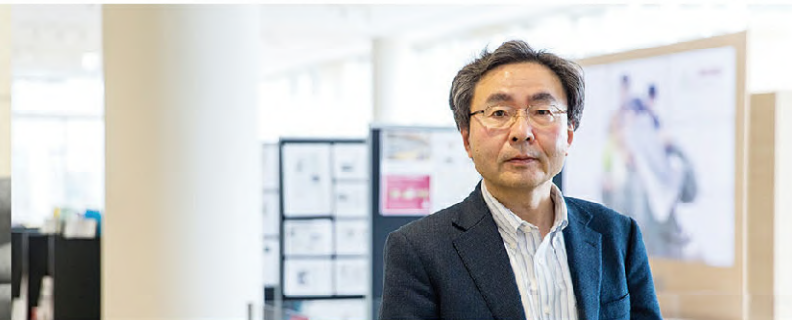


Ryoichi HIROI
廣井 亮一

司法臨床、加害者臨床、非行臨床、
家族臨床、犯罪心理鑑定

Masayoshi MORIOKA
森岡 正芳

臨床心理学、人間性心理学
カウンセリング



Yuko YASUDA
安田 裕子

臨床心理学、生涯発達心理学、質的心理学

Introduction



Human
Science

※左上から縦にあいうえお順

教員についての詳細は、
QRコードをご覧ください



人間科学研究科ホームページ



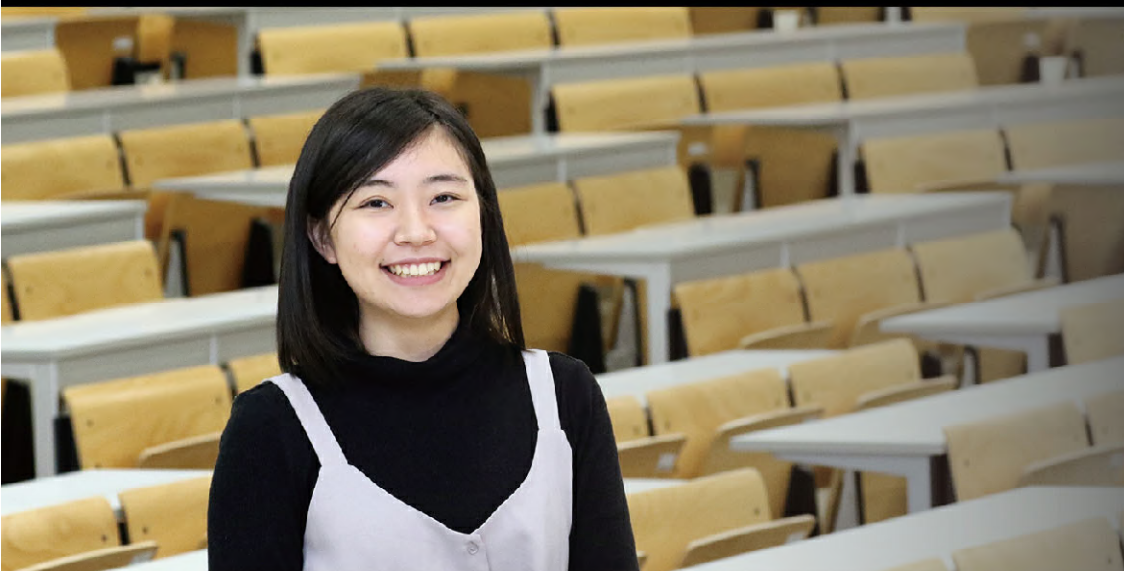
博士過程院生
Human Science

人間科学研究科博士課程前期課程 心理学領域1回生 高島 啓志さん

私が大学院進学を志望するようになったきっかけは、学部4回生の時に行った教育実習でした。もともと教育分野に興味があり、教員になることを志していましたが、実際に現場に入り生徒たちや先生方とお話をする中で「支援をする」ことの難しさを痛感し、心理学を将来活かしていくためにもより専門的な知識を身につける必要があると感じたため大学院へ進学することを決心しました。

人間科学研究科には3つの領域がありますが、私が心理学領域を選んだのは学部頃から世話になっている先生がおられたからです。また、心理学領域には非常に多岐にわたる研究領域を指導して下さる先生方がおられるというのも決め手の1つでした。実際、心理学領域の必修である演習授業では、自分では全く気が付かなかったような視点からアドバイスをいただけるので日々自分の知識や研究の幅が広がっていることを実感します。

さらに私は公認心理師の資格取得に向けたコースも履修しています。そのため実習に赴いたり、夜遅くのカンファレンスがあったりと忙しくはありますが、「よりよい支援」ができるようになるため日々頑張っています。修了後は人間科学研究科で学んだことを活かして、少しでも多くの方を支援することができるようになりたいと考えています。



博士過程院生
Human Science

人間科学研究科博士課程前期課程 臨床心理学領域 1 回生 安間 遊生さん

私は将来、臨床心理士・公認心理師の資格を取得し、医療領域を中心に心理臨床家として現場で働きたいと考えています。臨床心理学領域では、精神疾患や心理学に関する専門的知識はもちろん、知能検査などの心理検査の所見の書き方に関する心得、心理面接における心理臨床家としての態度や研究論文に対する批判的吟味の仕方など幅広い学びを得ることができます。これらのことは、心理臨床家として働くならば必要不可欠なことで、授業数は多く大ですが、質の高い臨床実践能力を養うことができます。

また、研究活動をする上でも人間科学研究科は恵まれた環境であると言えます。人間科学研究科には40名を超える教員が在籍しており、網羅されている領域は幅広いです。そのため、研究の方針等につまずいた時にオフィスアワーを活用して様々な教員に多様な視点からご意見をいただくことができ、それをきっかけに研究が進むことも多くあります。

社会人院生も多く在籍しています。学部からストレートで修士に来た私にとって社会人院生の実体験を基にした問題意識を聞くことは、自身の視野を広げることきっかけとなり刺激的です。

以上のように、人間科学研究科では広い視野を得ることが可能です。この視野の広さは修了後、様々な心理的問題を抱える人々を援助する時に役に立っていると考えています。



博士過程院生
Human Science

人間科学研究科博士課程前期課程 対人援助学領域 1 回生 宇佐見 佳純さん

私は不登校、ひきこもり現象とその支援について学術的な理解を深めたいと思い、入学しました。今や多様な捉われ方がされているこの現象ですが、ミクロに見ていけば当事者とそのご家族、支援者といった人間関係が様々な位相を経て、密に影響し合っているものと言えます。それらをご本人の声から丁寧に汲み取り、社会制度などと照らしながら支援の在り方を問うていく意味で、学際的であり質的研究が盛んな人間科学研究科はもってこいの環境と言えます。

本研究科は、全国でも類を見ない教員数と最新の施設設備が整っており、関心のある学びを多領域から掘り下げたり、時に教員の実践フィールドに複参加できるなど自己研鑽の機会が多くあります。対人援助学領域はその最たるもので、年代や所属分野が異なる生徒や教員同士が相互に刺激し合いながら日々活動しています。

こうした土壌があるからこそ、現在ひきこもり支援をはじめとした教育・福祉現場で多様な背景を持つ方々と繋がることができ、異なる立場をコーディネート/コーディネートする意義を再認識しています。今後はこうした実践知や問題意識を探索的研究に落とし込み、ひいては心理専門職としてそれらを支援現場に還元していきたいと考えています。

大学院生の声

博士過程院生

Human Science

人間科学研究科博士課程前期課程 対人援助学領域 1 回生 (社会人院生) 田村 美子さん

私は、看護師として病院で勤務しています。臨床では、がん化学療法を受ける患者さんと関わり、身体的・心理的・社会的・スピリチュアルな状況を包括的に理解し支援を行うよう努めています。患者さんご家族は、がんの診断や病状の変化に不安を抱いている中で、医療者の適切な助言と支援を求めています。そのため、納得して治療を選択できるような意思決定やQOLが向上できるような支援が必要だと考えています。しかし、実際の臨床では、十分な意思決定支援ができていたとは言えず、心理学に関する実践的な知識や幅広い視点での看護を見直す必要があると感じ、大学院に入学しました。

人間科学研究科では、社会と心理学との結びつきを重要視している点が特色であり、強みです。私は現在、「アドバンス・ケア・プランニング（ACP）の普及」に関しての研究に取り組んでいます。ACPは「将来の医療・ケアについて、本人を尊重した意思決定を支援するプロセス」で、厚生労働省では、「人生会議」という愛称を選定し、普及を進めています。

この研究で、少しでも社会に貢献できればと考えています。



博士過程院生

Human Science

人間科学研究科博士課程後期課程 1 回生 近藤 優佳さん

私は「声の臨床心理学」の創造を目指すべく、ごく当たり前に扱われる声が自己や他者との関係性を形成していくうえでどのような役割を担っているかを研究しています。

人間科学研究科は「何を研究したいのか」「何のために研究をしているのか」を徹底的に掘り下げる場所です。多彩な学問領域の専門家である先生方だけでなく、ここで学ぶ同志もまた多様な背景を持っています。研究の方向性が重なる相手はもちろん、一見自身のテーマとの繋がりを意識しにくい相手とも幅広く語り合う機会に恵まれています。この垣根のなさが人間科学研究科の大きな魅力であり、進学を希望した理由の一つです。

私は現在、臨床心理学の知見を取り入れながら、人前で話したり小学生を対象に声の表現を教えたりする活動をしています。そこで得た経験はそのまま研究の礎となり、自身の研究と実践の相互還流を実感する瞬間も少なくありません。修了後も、研究者であり心理臨床の専門家として活動を継続していきたいと考えています。

幼少期から変わらない声の仕事への憧れ、学部生の頃に専攻したメディア社会学の視点、修士課程で気づかされた声を活かした援助を実現したいという思い。ばらばらに蔓を伸ばす朝顔に支柱を添えるように、これまでの興味関心、体験、意志を人間科学研究科は結びつけてくれました。



博士過程院生

Human Science

人間科学研究科博士課程後期課程 2 回生 張 亦瑾 (CHANG I-Chin) さん

私は、台湾で臨床心理の訓練を受け、修士時代から女性支援をしてきました。現場と海外での実践や交流によって、豊かな知識を教えて頂きました。「愛にできることはまだあるかい？ 僕にできることはまだあるかい？」の歌詞のように、対人援助者の在り方を考えるために来ました。台湾小林村という被災地をフィールドに、人々の心理的回復とそれを支える対人援助者の在り方を研究しています。

留学生の生活は、予想以上に厳しかったです。言語の壁が高く、遂に学会で自分の考えを説明できるようになったのは、一年経ってからです。博士後期は同級生との接点が少ないので、人間関係も築きにくかったです。博士前期の授業聴講、大学の災害ボランティアや研究科の「東日本・家族応援プロジェクト」に参加し、留学生と村本ゼミをはじめ、皆さんに助けられました。2020年には十年目のひと区切りになりますが、「東日本・家族応援プロジェクト」の現地と協力することで地域の力を支え、災害と復興の証人になるという趣旨は理想的な対人援助者の在り方の一つだと思います。また、メンバーとして現地で活動するなかで、初めて自分と研究科の繋がりを感じられるようになりました。

これまでの研究は短距離走のようでしたが、博士後期の研究はマラソンのように、「自分のペース」と「諦めない」ことが大事だと思います。大変ですが「愛にできること」をよく頂いたので、研究者として「僕にできること」を探していきたいです。きっと皆様も見つけられると信じています。



Information & Curriculum

公認心理師養成の新たな課題

- チーム医療：他医療職との協働
- チーム学校：学校組織の一員としての役割・協働
- 社会の問題の複雑・多様化に対応する取り組み
- 対立関係の調整
- 災害への支援
- アウトリーチ、地域連携



公認心理師に求められるもの

- ◇ 心理査定、心理面接、地域援助、教育研究という従来の職務に加えて、状況を適切に把握し、事実を的確にアセスメントし即応した支援を行なえる技能・態度
- ◇ 多次元にわたり、輻輳する要因がかかわる困難な問題の増加→多職種との共同体制
- ◇ 良いチームワークとフットワークの軽いアウトリーチ

公認心理師には、知識以外に技能・態度の修得が求められています。人間科学研究科の博士前期課程カリキュラムは公認心理師対応プログラムです。（右ページに記載）

【心理学・人間科学】 研究マッピング



ゼミの運用方法

アライアンス制度の活用

	心理学領域	臨床心理学領域	対人援助学領域
通常ゼミ	教員 ゼミ院生	教員 ゼミ院生	教員 ゼミ院生
アライアンス週間	教員 他領域・自領域ゼミ生 垣根を超える！ 春期 2～3回 秋期 3回 教員 他領域・自領域ゼミ生 領域を超えた複数の教員研究Gが形成され、院生は自領域を超えて教員Gや他の領域の院生からも意見を貰うことができる制度。		

博士課程カリキュラム

博士課程前期課程カリキュラム（公認心理師対応プログラム）

心理学領域

基礎心理学特論
認知心理学特論
発達心理学特論（福祉分野に関する理論と支援の展開）
社会心理学特論
教育評価・査定研究（心理的アセスメントに関する理論と実践）
教育心理学特論（教育分野に関する理論と支援の展開）
健康心理学特論（心の健康教育に関する理論と実践）
産業・組織心理学特論（産業・労働分野に関する理論と支援の展開）
司法・犯罪心理学特論（司法・犯罪分野に関する理論と支援の展開）
家族心理学特論（家族関係・集団・地域社会における心理支援に関する理論と実践）
老年心理学特論（福祉分野に関する理論と支援の展開）
心理学統計法 心理学研究法 心理学演習Ⅰ～Ⅳ

臨床心理学領域（臨床心理士プログラム）

臨床心理学特論Ⅰ・Ⅱ
心理療法特論
臨床心理査定演習Ⅰ（心理的アセスメントに関する理論と実践）・Ⅱ
社会病理学特論（司法・犯罪分野に関する理論と支援の展開）
学校臨床心理学特論
精神医学特論（保健医療分野に関する理論と支援の展開）
臨床心理地域援助特論
臨床心理面接特論Ⅰ（心理支援に関する理論と実践）・Ⅱ
グループアプローチ（家族関係・集団・地域社会における心理支援に関する理論と実践）
臨床心理学基礎実習
臨床心理学実習（心理実践実習）
臨床心理学演習Ⅰ～Ⅳ

対人援助学領域

対人援助学研究法Ⅰ・Ⅱ
教授・学習学研究（教育分野に関する理論と支援の展開）
学校カウンセリング研究（教育分野に関する理論と支援の展開）
ユースワーク実践研究
ソーシャルワーク研究（福祉分野に関する理論と支援の展開）
司法臨床研究（司法・犯罪分野に関する理論と支援の展開）
臨床倫理研究
認知行動療法特論（心理支援に関する理論と実践）

障害児教育研究（教育分野に関する理論と支援の展開）
生徒指導・進路指導研究（教育分野に関する理論と支援の展開）
臨床心理学研究（心理支援に関する理論と実践）
対人援助技術研究（心理的アセスメントに関する理論と実践）
対人援助学特論
インターンシップ
対人援助学演習Ⅰ～Ⅳ
対人援助学実習（心理実践実習）
心理実践実習

共通科目

社会のなかの人間科学

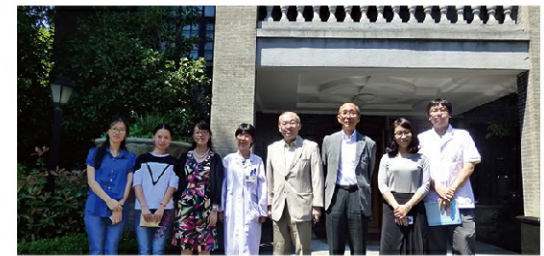
人間科学特論

博士課程後期課程カリキュラム

人間科学プロジェクト演習Ⅰ～Ⅵ

人間科学シンポジオンⅠ～Ⅲ

学外実習・学内実習



東日本家族応援プロジェクト
（対人援助学実習）



※その他、学内の「心理教育・相談センター」で臨床心理学実習を行います。



ベトナムハノイ実習（対人援助学実習）



高大連携プロジェクト
（対人援助学実習）

Human Science

DEVELOPMENT
PSYCHOLOGY
CLINICAL
HUMAN
SERVICE
R
FORENSIC
EDUCATION
COGNITIVE
BEHAVIOR
AGING
NEURO
MEMORY
FAMILY
AGING
SOCIOLOGY

人間科学研究科入学試験日程

<http://www.ritsumei.ac.jp/gshs/admission/>



人間科学研究科ホームページ

<http://www.ritsumei.ac.jp/gshs/>

